

# 私立全寮制御堂学園物語 卷3

## 第一章 Vision I

色の薄い髪に、わずかな湿り気を帯び、白いというより透けてしまいそうなユキちゃんの頬には、ほんのり紅がさしていた。

こんな宝物を手に行けるなんて思いもしなかった。わずかな金と、情熱、情念……？ そんな美しくもないものと、背徳を受け止めるだけで。

実際僕は、これほどの宝物を手に行けるなら、悪魔にだって魂を売り渡したろう。

『時よ止まれ、お前は美しい！』

ユキちゃんの手を引いて、僕は先にベッドのスプリングを軋ませた。ライトを落とし、デスクスタンドの柔らかなオレンジの光が、何を思っているのか見当もつかない、幼児のように表情の乏しいユキちゃんの顔を、ほのかに染めた。お互い、一糸も纏ってない。僕は若いつもりであるけど、ユキちゃんの肌の瑞々しさには、とうていかなわない。

僕は、できるだけ優しく、男の子が壊れやすい鳥の巣をおしただくように、ユキちゃんの細い腰に手をまわした。呼吸に上下する柔らかな腹部の動きが、僕の動悸を果てしなく高める。

ユキちゃんはずがまま。言葉は話さない。けど、僕の導く通り、動く。何より嬉しいのは、彼から怯えが消え去っていることだった。会ってから半日も経ってない。無論、それはユキちゃんにとって、だけれど。けどもう、きつとユキちゃんは僕がいなくちゃ生きられないんだ。親鳥

を失った雛のように、ただ帰りを待つて、飢えて死ぬしかない。それを感じている。

僕はユキちゃんを、僕の揃えて伸ばした足にまたがらせて、向かい合って、キスした。唇と唇が触れ合って、甘い香りがする。僕の性器は、ユキちゃんの未熟なそれと比べれば、全く醜く、獣のようだ。亀頭の形すらはっきりしない、小さなユキちゃんの性器は、それでも、ちゃんと固くなってる。僕はその性器と、陰嚢を下から手で優しく包んで、中指は伸ばして、股の間、奥へ伸ばし、時折後ろの穴を窺うんだ。

「ん……」

話すことを忘れていて、喉が引きつって声が出ない状態？ 舌がこわばっているのか……。時折漏らす高い少年の声は、本当に男の子というより小動物みたいだ。雛鳥かな。

軽い口づけと、性器への刺激を繰り返す。ユキちゃんの息づかいも荒くなっていた。試しに、包皮をめくってみた。

瞬間、ユキちゃんの顔にはつきりとわかる苦痛の表情が浮かんだ。

「痛かった？」

ユキちゃんはずくことすらせず、ただ目で、僕の言葉を肯定した。もう潤んでいる。このくらいのこと、泣いてしまわないでよ……。

(中略)

の体を引き寄せ、強く抱く。

「震えているね。恐いか」

答えるべき純也の口は塞がれている。しかし純也の目は恐怖に見開かれている。

(俺は、こいつに殺されるのかもしれない)  
そんな思いが純也の脳裏をよぎる。

口を塞いでいた手を離すと、清家はその手を純也の後頭部に回し、純也の頭を引き寄せて、その唇を吸った。

過去がフラッシュバックする。華奢で幼かったあの日の自分を、ここで、この場所で壊れそうなほどの力で抱き、口づけした、野獣のような男。

「お前は美しい。この世で一番かわいいた俺の宝物さ。お前は俺だけのものだ」  
自らを所有物と呼ぶ男に抱かれていた、あの時の束の間の幸福。

裏切り。欺瞞。怒り。憎しみ。……そして、孤独。

「苦しい、助けて……」

気がつくと、清家は、純也の首をその細い指で絞めつけていたのだ。清家は純也の体を思わず強くはじき飛ばし、自分の両手を見つめた。

全裸で尻もちをつくように倒れた純也は、身じろぎもできない。  
清家が、その体に覆い被さる。

「……殺さないで」

気丈な純也も、もはや恐怖にとられ、戦意を失おうとしていた。

清家は、その純也の上半身を、時には強く吸うように、時には啣むように荒々しく《愛撫》した。あの日の野獣が、自分にしたように。純也の滑らかな肌は、唾液で濡れて輝き、所々に赤い癍痕と歯形が刻まれる。

(痛い……)

しかし、ほんの少し陰毛の濃くなった純也の性器は、次第に膨らみを帯びてくる。

清家は、その純也の性器の皮を乱暴にめくり、固くした舌先で刺激した。あつという間に固く

なり、完全に勃起状態となる純也の幼い性器。

「体は嘘をつかない。人間の業だ。人間は皆穢れた豚だ」

何が清家をここまで虚無と邪悪に誘（いざな）ったのか、純也に理解できるはずもなかった。だが理性は崩壊しつつある。いつか《普通》の世界に戻れなくなるのではないかという恐怖に、純也は怯える。

「痛ッ……や、め、て……」

皮を剥いた亀頭に清家が歯を立てたのだ。

「健康で、明るくて、友達思いの男の子か」

清家はいったん口を離れた。かわりに中指を純也の肛門に突き立てる。

「あっ、ぐっ……」

「偽りを暴いてぶち壊してやる」

（中略）

「先生、痛いよ……」

そう云う少年を押し倒し、机の上に仰向けにして、教師は彼に覆い被さる。

「かわいいな……」

「俺が？」

「ああ」

「冗談云わないで」

はにかみよりも、戸惑い

「本気さ」

そして、ひげ面を少年の顔にすりつけるようにして口づけをする。煙草のヤニの臭いがする。

「せ、先生……。何するんだよ！ 先生、一体……」

「嫌か。でも先生は、俺はもうやめないぞ。お前を俺のものするんだ。……俺のものになれ」

洗い晒しの粗末なシャツがまくり上げられ、デニムの半ズボンとブリーフは手もなく抜き取られる。仮性包茎でほんの少しの陰毛。これから始まるのが性的な意味を持つことを、体は知っている。性器が固くなり始める。唾液で濡らした教師の太い指が性器と肛門を交互にまさぐる。右手で少年の性器への愛撫を続けながら、教師はズボンのベルトに手をかけ、すでに臨戦態勢の巨大な性器を露出させた。少年の下半身は完全な裸で、一枚きりの黄色いシャツは乳首が露出する所までまくりあげられている。いつも何事も短絡に暴力に結びつけていた少年も、この教師の前では大人しかった。それは教師が逞しく腕力でとてもかなわないからではなかった。教師はこの少年を一度も殴ったことがなかった。

大人の太い性器が、肛門を押し広げ、少年は震えた。性器への刺激はまだ続いている。

「痛！……痛い……先生」

「だろうな。だけど俺はもうやめない。俺のものになれ」

俺のものになれ、俺のものになれ、俺のものになれ……

(中略)

「今年の新入生の清家君を見たかい？」

くわえ煙草のいかつい顔には、少々下卑た笑みが浮かんでいた。猪瀬は、抱えていた古びれたフォークギターで、意味もなくGセブンスのコードを弾いた。

「見た。すごきれいな子だ。しかも女性的じゃないところがいい」

「勉強もスポーツも何でも来いだってさ。そして御堂大幹部、将来の取締役清家京輔の御曹司だ。何もかも揃ってる」

「そういうプライドの高い子を落とすのが趣味だったっけな」

猪瀬は、今度はA HARD DAYS NIGHTのイントロの不協和音を弾く。

「仰せの通りだな。だけどお前だって欲しいだろ。好みのタイプズバリじゃなくても、あれだけの美少年だ」

「……確かに、疼くね」

「だろ？ どっちが落とすか賭けるか？」

猪瀬はギターを置く。

「まあ、やめとくよ。わっさんに勝ち目なさそうだしな。僕は来る者は拒まずだが、あんたみたいに強引にはやれないし」

「カッコつけるぜ。どっちみち犯罪は犯罪だぜ。やるなら欲しいものは全部手に入れるために、行動あるのみだ」

涌坂はニヤついて自分の太い腕を叩く。猪瀬は苦笑いした。

「犯罪犯罪って云うなよ。……やるなら気をつけてやってくれよ。大物の御曹司だ」

「せいぜい、気をつけるよ」

涌坂は鼻歌交じりに出て行った。燃えさしの煙草を美術室の机の隅に置き忘れて。猪瀬はその煙草をもみ消して、とりあえず欠けた絵の具皿に載せた。

(中略)

「……やりたいように、よそでやれ。『友情』を踏みにしてやんな。秀一の力を使いたくないとか、余計なこと考えない方がいいぜ。勝てばいいのさ。そして楽しければな」

(中略)

「ふふ」

村原は太筆を宙吊りの裕の小さい肢体に這わせていた。

「あ、あ……や、だ……」

裕の幼い生殖器が反応を始めている。

「すっかり変態エロ小僧になったなこいつ」

村原は後ろを向いて、ビデオカメラを回すのに夢中になっている宮下に声をかける。

「半泣きの顔がそるよな」

宮下はにやつきながら応える。

「水入れ取ってくれ」

「ああ」

宮下はベッドの上に投げ出してあった習字セットから水入れを取り出す。村原は受け取ったそのプラスチック容器の水を太筆に含ませた。

「濡れてるとまた違う味わい、らしいぜ」

村原はたっぷり水を含ませた太筆を、裕の肛門の周囲に走らせた。

「あ……つつ……」

裕が思わず身をよじると、吊られた両手を支点に彼の体が揺れる。

「暴れんなよ。手が痛むだけだぜ。つても、くすぐったくてじっとしてられんか」

村原は、羽のように触れるだけのアクションからある程度力を入れて筆を這わせるやり方に変更した。肛門の襞や陰囊の周囲、ペニスの先にも冷たい筆先を押しつける。

「く、あ……」

ペニスが膨らみ、先走りかじみ出る。裕は恥辱に涙を滲ませ、ついに嗚咽を始めた。

(泣き出したか……。かわいいねえ)

村原は宙吊りの裕のあごに手をかけた。いやいやをするように首を振る裕。頬を涙が伝う。

「気持ちよすぎてヨガリ泣きかな、坊や。……だが本番はこれからだ」

(中略)

て) (僕、もうダメだ……お父さんごめん。……純ちゃん、まあ君、猪瀬……先生……誰か、助け

「……汚点だよ。我が社の汚点だ。あの男（清家）は手段を選ばない男だしびれる、なにかがもれそう、にげたい

「『人殺し』に弱いものいじめ呼ばわりされるいわれはないね」  
こんなところで、死にたくない……

**本編をお楽しみに！**